

デイヴィッドソンの言語哲学

Steven Michael James

ドナルド・デイヴィッドソンの研究範囲はかなり広く、いろいろな分野に革命的な影響を与えた。言語哲学においても同様である。デイヴィッドソンは初期の頃、形式化された意味理論を紹介した。その理論の確認方法として、根元的解釈を提案した。中期には、言語的コミュニケーションのために、共通言語的規約の必然性を否定して、個人語主義を唱えた。さらに後期には、意味理論と根元的解釈をもとにして、個人語主義的な規範の解明を展開した。デイヴィッドソンの基本的な研究動機は、言語的なコミュニケーションのために何が必要なかを問うことであった。その個人語主義的な規範には、共通経験について同じ信念を持つ必要があるという結論を導き出した。本稿の主張は、言語的なコミュニケーションのために必要なのは、共通経験について同じ信念だけではなく、独立的に既存している世界についての相互知識を持つ必要もあるという点だ。

真理と意味

初めて真理条件を用いて意味を解明した哲学者は、デイヴィッドソンではなかったが、彼は初めて真理条件の意味理論を形式化した⁽¹⁾。その真理条件の意味理論を理解するためには、その形式化の動機、仕組み、そして批判を理解しなければならない。簡単に述べると、デイヴィッドソンは、既在していた三つの理論的要素を合わせて、意味という謎を解こうとした。その三つ

(1) Davidson, D. (1967) "Truth and Meaning." In Davidson, D. (1984) *Inquiries into Truth and Interpretation*. New York: Clarendon Press.

の要素とは、フレーゲの真理条件という概念、タルスキーの形式真理論、ラッセルの論理形式の概念である。

真理条件とは、ある文章、あるいはその文章が表現している命題の本質の一つである。その文章がどのような条件下において真、もしくは偽であるかが、その文章の真理条件である。たとえば、「そのペンは赤です」という文章の真理条件は、その文章を発言した人の指しているペンは赤だということだ。真理条件は、意味に依存するものだと思われるかもしれないが、デイヴィッドソンの提案は、意味と真理条件の関係はそれより深いというものである。

大まかに言うと、従来の哲学者は意味を探究する際に、存在者を仮定した。言葉には意味があって、文章は命題を表現する。デイヴィッドソン流の意味理論は、意味や命題という存在者を必要としない。厳密に言えば彼の主張は、意味理論を作るためには、意味や命題というものが役に立たないという点だ。意味という存在者をそれぞれの言葉に割り当てても、文章の命題を決定することはできないからだ。たとえば、「スーパーマンは飛ぶ」という文章が表現している命題は、どのようにして、その言葉の意味に依存しているかということを開くとする。その答えとして、二つの言葉の意味を合わせると、その命題が産出されるからというのは、明らかに空虚だ。

文章の命題が、どのように語の意味に依存するかということは、言えないかもしれないが、文章の真理条件が、どのように語に依存するかということは言うことができる。まず、一つ理解すべきことは、真理条件の意味理論には、語より文章のほうが優先されるということだ。なぜなら、言葉には真理条件がない。「犬」という言葉は真でも偽でもない。文章（宣言完結文）には真理条件がある。「それは犬だ」という文は真値があるから、真理条件があるにちがいない。デイヴィッドソンの提案によると、言葉には意味（とい

う存在者)がないが、役割がある。言葉の役割は、文章の真理条件を決定することだ。従って、真理条件の意味理論の目標は、文章の真理条件を与えると同時に、言葉の役割を表すことだ。

しかし、言語はいずれも言葉の数は有限であるが、構成できる文章の数は論理上無限である。従って、目指している意味理論は、有限の言葉から無限の文章の真理条件を発出できる理論である。タルスキーの形式的真理論は、再帰的で組み合わせ的なので、そのような理論と言える。本来は、数学真理の理論だが、デイヴィッドソンの洞察は、数学のような人工言語だけではなく、意味理論として自然言語にも適応できるということだ。

数学的な理論の形態は、公理から推理規則を通して、定理を推理する。デイヴィッドソン流の意味理論の公理には、主に二つの種類がある。名詞の指示対象と述語の満足条件だ。述語論理学を使用すると、公理から無限の文章の真理条件を導き出すことができる。たとえば、「Snow」という言葉の指示対象は雪で、「is white」という述語の満足条件は白いものだという二つの公理から、「『Snow is white』という文章が真であるのは雪が白い場合、そしてその場合に限る」という文章を導き出せる。このような定理はT-文という。(この例では、日本語を使って、英語の文章の真理条件を表現している。だが、同言語の場合でも可能だ。) T-文とは左側には引用された文章があって、右側にはその引用された文章の真理条件がある。仮にPが文章だとすれば、T-文にはこの構成がある。

「P」という文章が真であるのはPの場合、そしてPの場合に限る。デイヴィッドソン流の意味理論は、ある言語のそれぞれの文章にはその文章の真理条件を提示する。

真理条件の意味理論を適応するためには、文章の正しい論理形式を決定しなければならない。論理形式と文法は別物であり、前者が優先であるという

ことを歴史上初めて主張した哲学者は、バートランド・ラッセルだった。ここではラッセルの著名な例を挙げる⁽²⁾。「The present king of France is bald」という文章には真値がなさそうである。なぜなら現在フランス王はいない。しかし、ラッセルの考え方では、我々はこの文章の文法にごまかされている。実は、この文章の真値は偽だ。ラッセルはフレーゲの提唱した述語論理学を通して、次のようにこの文章を分析した。具体的にはあるものが存在していて、そのものは現在のフランス王で、そのものは禿で、そのものは一つしかない。記号では、

$$\exists x[F(x) \& B(x)]$$

「 $\exists x$ 」という記号は存在量子化子と言って、「 x というものがあって」と読む。 x という変数を使って、ある物 x は F (フランス王) という性質もあって、その同じもの x は B (禿) という性質もあるということを表記する。しかし、この分析は不十分だ。例の文には「the」という定冠詞がある。というのはフランス王が一つしかない。それを記号的に表すために少しの工夫が必要だ。一つしかないというのは他の言い方で、世の中の他者はフランス王ではないということだ。だから、フランス王を探し出すと、さっきの x という物と同じものとなる。記号を表記すると、

$$\exists x[F(x) \& B(x) \& \forall y[F(y) \rightarrow y=x]]$$

「 $\forall y$ 」という記号は全称量子化子と言って、「全部の y には」と読む。 x と y という変数を使って、 F という性質を持っているものは一つしかないということを表記する。他の全部の物 y には、もしその物が F であれば (\rightarrow) x という物と同じ物だ ($y=x$) と表記できる。このように記号を活用することで本来の文章の論理形式を明確に表現できる。

(2) もちろん、この分析を批判する哲学者はいないとは言えない。特に説得力のある批判はストローソンとドネランの批判であるが、本文では歴史的に有名な例として利用した。

この文章の論理形式は論理合接だ。述語論理学の推論規則によると、論理合接の真理条件は両方の合接詞が真で、そしてその時のみ、その文章は真である。例の文章の最初の合接詞によると、現在のフランス王が存在している。実際には存在していないので、その合接詞は偽で、その文章も偽である。

上記から二つの結論を導き出す。一つは言葉の意味を理解するだけで、文章の真理条件を決定できない。もう一つは文法と論理形式が違うので、言葉の意味と文章の文法がわかっても、文章の真理条件を決定できない。言い換えれば、ある言語の文章の真理条件を決定するには、辞典と文法書では不十分ということだ。結論から言うと意味理論は、タルスキ流の真理論の形態をとる。

意味理論においては、デイヴィッドソン流の意味理論がもう一つの目標を果たす。すなわち、推理関係を保存するということである。たとえば、例の文章を前提すると、ある禿のものが存在しているという結論を推理できる。その文章の論理形式から見ると、その推理は明白だ。その結論は例の文章の合接詞の一つで、合接が真ならば、それぞれの合接詞も真であるという推理規則である。

上記が正解ならば、伝統的な意味論より真理条件の意味理論の方がいくつかの面で優越である。後者は真理条件、言葉の役割、論理形式、推理関係を全部解明する理論だ。従来、意味や命題という存在者を仮定して、意味プラス文法イコール命題、というようなアプローチはやはり机上の空論である。

真理条件の意味理論には、一つの問題がある。意味は真理条件より細かいという問題である⁽³⁾。つまり、同じ真理条件がある文章は違う意味を持つケー

(3) 専門用語では、真理は外延的で、意味は内包的だと思われる。

スもある。たとえば、『That is water』という文章が真であるのはそれはH₂Oである場合、そしてその場合に限る」という文章はあくまで真であるが、引用されている英語の文章の意味と使っている日本語の文章の意味は明らかに違う。いわゆる例外T-文だ。

デイヴィッドソンは二種類の要素が相合にこのような例外T-文を避けることと主張した。一つは理論内の組み合わせと推理関係だ。もし、ある意味理論が多数の公理から無数の文章の真理条件を表す定理(T-文)を提供する上で、文章の論理形式が正しい推理関係を保存するなら、例外T-文が現れる可能性は非常に低い。例外T-文を防ぐもう一つの要素は論理外の要素である。意味理論の対象は抽象的な言語ではなく、一人の話者の言語で、その理論はアプリアリではなく、経験上確認する理論である。特定の意味理論の証明的根拠は、ある話者の言語行動だ。従って、その話者とのコミュニケーションをもとにして、真理条件的に同等の文章を区別することができ、例外T-文を避ける。その経験上確認するプロセスは、根元的解釈である。

根元的解釈

根元的解釈とは、全くの初歩から理解不可の言語を解釈することだ⁽⁴⁾。根元的解釈というと、人類学者を想像するかもしれないが、哲学者の思考実験の一つである。もとは、クワインが知識と意味の関連を探究する中で考えた思考実験だが、デイヴィッドソンは意味理論を組み立てるのに必要な証拠を理解するため、根元的解釈の思考実験を行った。

意味理論が経験科学の理論と同じく、経験上で確認する理論であるなら、なぜ思考実験を利用するのかという疑問が自然に生じる。その答えは、デイ

(4) Davidson, D. (1973) "Radical Interpretation." *Dialectica*, 27, pp.314-28.

ヴィッドソンの目標は、実際にある話者の意味理論を組み立てるわけではなく、組み立てるために何が必要かという、哲学的な問いに答えることだからだ。すなわち、人間は乏しい証拠である理解不可の行動から、立派な意味理論を組み立てるために、何が必要なのか。特に、例外 T-文を避けて、正しい意味理論を組み立てるために、人間について、何を想定する必要があるのかという問いに答えることだ⁽⁵⁾。

意味理論と行動である証拠の間に、二つの仲介がある。理論側には T-文であり、証拠側には話者が文書を真と見なすことだ（つまり、主張することだ）。簡単に言えば、意味理論を作るのに、T-文と話者の主張が一致する必要がある。その一致の根拠は真理条件だ。たとえば、ある話者が、よく雨が降っている時に「It is raining」という文を発話するとしたら、その主張の真理条件は雨が降っていることだという仮説を通訳者が立てる。その主張とその条件はこの T-文の証拠になる。具体的には、

『『It is raining』という文章が真であるのは雨が降っている場合、そしてその場合に限る。』

しかも、その主張とその条件の一致は、この T-文を論理的に含意する意味理論の一つの証拠にもなる。このように仮説演繹法に従って証拠である言語行動をもとにして意味理論を組み立てる。

しかし、この提案には一つの問題があることにデイヴィッドソンは気が付いた。それは主張が二つの要因によるということだ。つまり、ある文章を主張することは、その文章の真を見なすことがその文章の意味による上に、その文章が表現している信念にもよることだ。従って、その発話された文章の意味がわかれば、その表現されている信念も理解することができる。同様に、

(5) もちろん人間は相互理解のために、真理条件の意味理論を実践的に組み立てるわけではない。しかし、形式的真理論が記述しているのは形式知ではなく、暗黙知である。人間の能力を形式化している。

その表現された信念がわかれば、その発話された文章の意味もわかることができる。しかし、根元的解釈では前提として意味も信念もわからない。二つの未知数の中で、一つを安定して、もう一つを計算するというようなストラテジーを取る必要があることが、デイヴィッドソンの洞察だった。その安定の一つは信念である。大体、話者の主張している文章は真だということを想定する。いわゆるチャリティー原則によると、話者の言葉を解釈すれば、その話者の信念ができるだけ真であるように解釈する必要がある。そうではないと解釈することができない。たとえば、黒いペンを指しながら「That pen is red」と言うようなミスは、あればあるほど解釈者が混乱するようになる。哲学上の結論は、解釈可能な話者の信念が大体真であり、整合的である。

規約の否定と第二人称の必要性

大半の言語哲学者には、言語が性質的に規約的なものだと思われている。規約とは、ルイスの分析によると、集団行動の問題を解決する方法だ。すなわち、その解決方法は一つ以上あって、根拠はないにも関わらず、一つの解決方法を選ぶしかない。しかも、その解決方法がその集団のメンバーに知られている上に、みんなそのお互いの知識を共有する。たとえば、日本では大体の人はエスカレーターに乗ると、歩かない人は左側に立って、歩く人は右側を上る。確かに逆でもよいのだが、みんな同じようにして、しかもお互いにこの知識を認識する限り、エスカレーター混雑の問題が解決できる。(実際に関西の場合は、その逆である。)

言語も同じように、規約的だと言われている。問題は、コミュニケーションだ。世の中に、いくつかの言語があるということが表しているように、その問題の解決方法がいくつかある。たとえば、犬を示したい時、英語でドッグという発音の言葉を使うが、日本語ではイヌという発音の言葉を使う。こ

の二つの規約を交換してもよいだろう。日本人がみな「イヌ」のかわりに、「ドッグ」と言っても、お互いにこの知識を共有する限り、指示の意味が変わらないため、犬についての会話はそのまま続くだろう。言葉の使い方はそのように規約的だと思われている。文法も同じように規約的だと思われている。

規約は共通しているので、言語規約も共通している。従って、二つの結論が導き出される。一つ目は、一人だけの話者が話している言語はない。つまり、言語の存在には言語集団が必要だ。二つ目は、言語集団のメンバーは同じように（同じ言語を）話す必要がある。デイヴィッドソンはその結論二つともを否定する⁽⁶⁾。コミュニケーションのために、同じ言語を話す必要はない。しかも、一人だけの話者が話している言語はありうる。デイヴィッドソンは、このような言語規約はコミュニケーションの助けになると賛成しているが、コミュニケーションの必要条件としては否定している。しかし、言語規約が必要条件でないならば、言語は性質的に規約的なものではないということになる。

ここまで考察してきた考え方を遡ると、意味理論の対象が共通言語ではなく、個人語だということを自然に推論することができる。ある解釈者は特定の話者の言葉を根元的解釈して、意味理論を組み立てる。従って、コミュニケーションの基盤は共通言語ではなく、共通解釈だ。話し手の責任は聞き手と同じ言語を話すことではなく、正しく解釈できるように話すことだ。聞き手が話し手の文章の真理条件を正しく割り当てるために、聞き手は話し手の信念ができるだけ合理的で真であるように解釈し、さらに話し手は聞き手に表現している信念が合理的で真として解釈されるように話す。真は解釈を可能にする。コミュニケーションは解釈の一種だ。従って、真はコミュニケーションも可能にする。

(6) Davidson, D. (1983) "Communication and Convention," In Davidson, D. (1984) *Inquiries into Truth and Interpretation*, New York : Clarendon Press.

言語規約の必然性を否定するからといって、話し相手が必要ではないという結論をデイヴィッドソンが推論するわけではない。個人語自体の存在は、第二人称に依存すると主張する⁽⁷⁾。規約がなければ、どのように特定の真理条件のある文章を決定するかということが疑問になる。その問題を解くのに、意図は最も重要な要素だ。話し手がある真理条件を表現する意図を通して、ある文章を発話し、しかも、その聞き手がその意図を認めて意図通りにその文章に真理条件を割り当てた場合、解釈が成功する。しかし、話し手が何を言おうとも、意図がある限り、その意図通りに真理条件を表現できるわけではない。意図通りに真理条件を表現しているかどうかの根拠は、意図通りに解釈されているかどうかということだ。「ドッグ」と言って、犬だという真理条件を普段表現するが、もし聞き手がその意図を認識できれば、「 $2 + 2 = 4$ 」を表現するケースも難しいが想像できる。結局、表現されている真理条件は、話し手の意図と聞き手の解釈の一致によるものだ。だから話し手の個人語には聞き手の存在が必要条件である。

話し相手の必要性は指示詞学習でよく見られる。また、指示詞学習は根元的解釈の一種であることをデイヴィッドソンは想定している。デイヴィッドソンによると母国語を習っている子供は大人から共通言語を受け継いでいるのではなく、個人語を習っている。しかし、その言語は既存していないから、指示詞学習では新しい言語が誕生している。このプロセスのために、子供は大人と同じ言語を話す必要はない。必要なのは、子供が類似の物の前で類似の反応をすることだ。大人はその物と子供の反応が類似だという判断を子供と一致しなければならない。つまり、この物とあの物は同じような物（同じクラス）だということ、真であることに賛成しなければならない。また、お互いに表している信念は真であることを想定しないとコミュニケーションができない。

(7) Davidson, D. (1992) "The Second Person." In Davidson, D. (2001) *Subjective, Intersubjective, Objective*. New York: Clarendon Press.

言語的なコミュニケーションのために必要なものは意外にシンプルだ。まず、必要のないものは不思議な存在者（例えば、意味、命題等）を把握することと、共通言語を話すことだ。存在者として必要なのは、コミュニケーションをしている生き物二人以上と、ある共通世界である。指示詞学習では、その指されている物の役割は大人の言葉の意味の手がかりではなく、その子供の新しい個人語の一部の真理条件である。従って、その物は基本的に必要である。しかも、子供の新しい言葉は真理条件を持つために、大人と子供の類似感、意図と解釈が一致しなければならない。つまり、話し手と聞き手は同じような生き物で同じ世界に住んでいる上に、その共通世界について同じ信念を持つ。これは言語的なコミュニケーションのための基礎的必要条件である。

社会集団と相互知識

ここでは、デイヴィッドソンの言語哲学が間違っているわけではないにもかかわらず、未完成だということを議論する。厳密に言うと、コミュニケーションの基礎は真だけではなく、知識であることを主張する。特に、社会的な相互知識だ。上記のように、デイヴィッドソンの動機はコミュニケーションの必要条件を把握することだった。しかし、コミュニケーションを理解するために、その必要条件だけではなく、コミュニケーションがなぜ人間にとって必要なかを説くことが役に立つ。とくに、コミュニケーションはどのような役割を果たしているか、そしてその役割を果たすために何が必要なのかを説くなら、洞察を加える。

一つの仮説は、言語的コミュニケーションが社会集団のために必要だということだ。もちろん、社会集団と言語ではどちらが先に進化してきたかを確実には述べられないが、同時に進化してきた確率が高い。必要性としては、社会の営みのために言語が必要であることは説得する必要がないかもしれな

いが、役割としては、社会集団が発生するために、言語が進化してきたということについて議論が必要だ。昆虫学者であるエドワード・オズボーン・ウィルソンによると、コミュニケーションの起源は巣であった⁽⁸⁾。巣のなかに残る生き物に、巣の外の状態を伝えるために発達した。たとえば、ミツバチのダンスがそうである。採餌ハチが巣の中にいる仲間に蜜や花粉の場所を教えるミニ言語である。ダンスの動きで太陽の位置に相對して、対象の方向と距離を知らせる。この役割を果たすために、この素朴な社会集団のなかでこのダンスが進化してきたと思われる。

言語以外にも、社会集団の発達には必要な要素は確かにいろいろとあるが、言語に関連する要素としては約束がある。社会的な集団行動を整理するためには、約束をして、それを守ることが必要だ。採餌、狩猟採集、農業、売買、職業、交通、商業、教育、種々の社会的な集団行動は約束に依存する。「明日会いましょう」というような約束は、社会のなかで至る所に存在する。明示的な約束も暗黙の約束もある。前者は「明日会いましょう」というふうに二人がお互いにあることを約束するというような場合であり、後者は会社の朝のミーティングの時間が決まっていて、社員は出席することを暗黙に約束しているというような場合だ。両者には相互知識の一種が必要だ。それは相手はその約束をしたという知識だ。そうでないと、自分がその約束を守る動機はないからだ。

言語的コミュニケーションと約束の関係は、約束文で見られる。本稿では宣言完結文に注目してきた。意味理論から導き出す T-文は宣言完結文の真理条件を表し、根元的解釈の基本証拠は宣言完結文の発話である。宣言完結文を優先することは真理理論の仕組みの影響があるが、歴史的に見て、実証主義の影響もある。実証主義には、感覚的経験に密着している宣言完結文が

(8) Wilson, Edward O. (1975). "Sociobiology the New Synthesis." Harvard University Press.

科学の基礎的な証拠という役割を果たした。その実証主義の傾向に反して、ジョン・ラングショー・オースティンは言語の多様性、特に発語内行為を強調した⁹⁾。文章の種類には宣言完結文以外、疑問文、命令文、約束文等がある。後者の文章の特徴は宣言完結文と違って真値がない。「座りなさい」という命令文は情報を伝えているわけではなく、真値もない。

しかし、言語行為論は真理論的な意味理論にとって困難にならない。たとえば、約束文を考慮する。意味理論は約束文の対応 T-文を扱うことができる。宣言完結文が表しているのは、ある真理条件が既存しているということだ。約束文はある文章の真を見なすことではなく、その文章の完成条件が生じるように努力するということを表す。「明日会いましょう」という約束文の完成条件は、その話している人々は「明日会います」という文章を真にすることを賛成している。この文章は真理条件があるから、T-文が作れる。

「明日会います」という文章が真であるのは話している人々が明日会う場合、そしてその場合に限る。

ただ、宣言完結文と約束文は語用論上違う。とくに、意味理論上は変わらないが、根元的解釈でその理論を確認したら、想定する必要のあることは違う。宣言完結文を解釈するためには、話者の信念は大体真であることを想定しなければならない。一方、約束文を解釈するためには、特定の相互知識を持っていることを想定しなければならない。「明日会いましょう」というような相互約束の場合、三つの条件を満たす必要がある。すなわち、

1. 二人ともその約束文の完成条件を真にするように、自分が努力することをその文章の発話で表す。
2. 二人とも相手に関して1を知っている。
3. 二人とも相手に関して2も知っている。

(9) Austin, John (1962). *How to Do Things with Words*. Harvard University Press.

たとえば、もし「私たち明日会いましょう」という約束したら、

1. 二人とも自分が明日会う約束をすることを、その文章の発話で表す。
2. 二人とも相手はその約束をしていることを知っている。
3. 二人とも自分が約束していることを相手が知っていることを知っている。

このような相互知識は約束文を解釈するのに必要である⁽¹⁰⁾。その対応 T-文を想起して仮説を立てる解釈者は、話者がある事情を記述しているわけではなく、ある事情を実現するように努力することを、約束していることを前提として理解しなければならない。

振り返ってみると、ミツバチのダンスは宣言完結文のアナログではなく、約束文のアナログだ。このダンスは相互活動のために進化してきた。確かに、そのダンスでハチは情報を伝えている。しかし、暗黙に「行きましょう」と言っている。仮に、本能ではなく、その相互知識があったとしたら、約束文に近い上に、言語的コミュニケーションにも近いと言えるだろう。従って、もしウィルソンが正解であれば、言語的コミュニケーションの起源は社会集団の基礎である約束文ということになる。

デイヴィッドソンの根元的解釈は消極的で、例の相互知識は活動的だ。前者は聞き手が話し手と話し手の環境を見ながら、発話はその環境を反映している。その発話の意味を理解するために、その発話の表現している（環境について）信念は真だとうことを想定する。この見方で、信念は消極的に環境を反映する。相互知識を考慮すれば、発話を解釈するために、その表現している内容を一緒に真にすることを理解しなければならない。つまり、協力して真すなわち世界を変える。

(10) Cf., Vanderschraaf, Peter and Sillari, Giacomo, “Common Knowledge”, The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Spring 2014 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/common-knowledge/>.

この論点は大切である。イアン・ハッキングという科学哲学者によると、概して現実主義には二つの種類がある*。理論現実主義は、科学の理論が正しく現実を反映する。理論を確認する方法は仮説演繹である。理論から予測を導き出して、調べる。もう一つの現実主義は、存在者現実主義だ。科学の理論はいろいろな部分が間違っているかもしれないが、その理論の仮定している物（原子、重力、ブラックホール）はその存在に疑問を持ちにくい。たとえば、もし電子が存在していなかったら、どのようにして電子顕微鏡の動きを説明できるだろうか。存在者を仮定するだけでなく、このように存在者を使うようにすれば、その存在は疑うことが難しい。地動説から惑星の軌道を正確に予測できるというように、間違っている理論でも正しい予測はできるが電子顕微鏡のような複雑な相互作用の仕組みは偶然では説明できない。

同様に、デイヴィッドソンの意味理論の方法論は消極的である。意味理論から予測を導き出して、根元的解釈で調べる。相互知識の場合、お互いの思っていること、希望していることを協力して実現する。もしその相互知識が間違っていたら、どのようにしてその行動の成功を説明するか、ということが疑問になる。つまり、どのようにしてその社会の複雑な相互作用を説明するのか？ 人間は最初から（歴史的にも、個人発達にも）協力して自分の環境を変える。つまり、人間の精神は世界を反映するだけでなく、世界を作るのだ。

やはり、デイヴィッドソンは実証主義に影響された。彼の先輩であったクワインの先輩（カルナップ）は実証主義者だった。クワインはその実証主義を否定したのにもかかわらず、その枠内から飛び出すことはできなかった。デイヴィッドソンもクワインの経験主義を否定したが、二人のプロジェクトは類似している。クワインの興味は知識論だった。彼の動機質問はどうやっ

* Hacking, Ian. (1983). *Representing and Intervening*, Cambridge University Press.

て人間は乏しい証拠である感官刺激から、立派な世界観、とくにその想定している存在論まで進むのかというものだった。デイヴィッドソンの動機質問は、人間は乏しい証拠である理解不可の行動から、立派な意味理論を組み立てるために何が必要なのか、というものだった。さらに、二人とも宣言完結文が基本的な証拠であった。結果として、デイヴィッドソンの動機質問に対しての答えは信念に関わった。宣言完結文が表している信念は真であることを想定しなければならない。

本稿の提案は宣言完結文より、約束文のような文章のほうが実際のコミュニケーションには基本的だということだ。従って、コミュニケーションのために、人間について想定しなければならないことは、デイヴィッドソンが想定していたものより多い。人間の信念が大体真である上に、相互知識を持っていることも想定する必要がある。人間は性質的にグループで住んで、社会を作る動物だ。社会集団の存在自体には、言語的コミュニケーションが必要だ。その役割は集団行動を整理するためである。その役割を果たすためには、相互知識が必要となり、さらに人間のコミュニケーションが表しているのは真であることだけではなく、真にすることも同様に表している。人間は共通の努力を通して、世界を変える。科学の理論と同じように信念はいろいろなところで間違っているかもしれないが、科学が仮定している存在者と同じように他の人を含めて、様々の物の存在が確実であると言えよう。